

エドゥアール・グリッサンと『アコマ』(1)

中村隆之

目次

問題の所在

1 IME 設立

2 『アコマ』誌について

3 第1号の目次と構成

4 巻頭言とフォアマンの文章の紹介と分析

5 共同研究の紹介と分析

小括

問題の所在

本論は、マルティニク生まれのフランス語作家エドゥアール・グリッサン (Édouard Glissant, 1928-2011) が刊行した『アコマ (Acoma)』誌を対象とする研究である¹⁾。

『アコマ』は1971年から1973年にかけて、全5号、計4冊刊行された雑誌である。本論がこれに注目する理由は主に2つある。

1つは、狭義の作家研究の関心にに基づいている。すなわち、グリッサンがこの雑誌を創刊しようとした企図はどこにあったのか。さらには、この雑誌がグリッサンのその後の活動に対して果たした役割とは何であるのか。これらの点を明らかにするためである。

もう1つは、カリブ海文化の横断性への関心に由来する。雑誌という複数の著者が関わる(時限的)媒体は、それ自体、ある場への介入を目指す〈運動体〉である。ではこの〈運動体〉は何を目指そうとしていたのか。〈運動体〉が形作るその企図は、創刊者の企図と重なり合うのかどうか。また、具体的にはどのような論考や作品が収録され、雑誌全体においてどのような役割を果たしているのか。それらの解明を目指す。

対象資料となる『アコマ』は、前述の時期に、パリのフランソワ・マスペロ書店 (Librairie François Maspero) から刊行されたのち、2005年にペルピニャン大学出版から合本の形で復刻・再刊された。本論で用いるのはこの復刻版である²⁾。引用に際しては、Aと略記し、文中に、各号のページ数ではなく、合本版のページ数(すなわち創刊号から最終号までの通し番号)を併記する。

管見の限りだが、この雑誌を対象に分析する研究はいまだない³⁾。そこで、最初に、この雑誌が出版される背景を確認する作業をおこなう(第1節)。その後、『アコマ』の目次から全体の構成とその意図を確認した上で(第2節と第3節)、第1号の主要な内容を検討することにする(第

4 節と第 5 節)。

1 IME 設立

この雑誌は、グリッサンが1965年のマルティニック帰郷後に取り組んだ私営の学校設立と不可分である。「マルティニック学院 (Institut Martiniquais d'Études)」(以下 IME と略記) と呼ばれるこの学校は、1967年にフォール＝ド＝フランス市の富裕層地区として知られるディディエ地区の屋敷をグリッサンが自ら買い取って校舎に改装したものである。

IME の概要は、『アコマ』創刊号 (1971 年) の巻末に記されている。記名はないが、その文体上の特徴および内容からグリッサンのものであると推察されるその文章の骨子を翻訳・引用し、解説をおこなう。

IME はその存在でもってマルティニックにおける教育上の憂慮すべき諸問題を解決できると主張するものでは無論ない。しかし、この組織 (第2課程 [後期中等教育——引用者注、以下同] の生徒 300 人、すなわち第2学年、第1学年、最終学年——高等教育の段階への導入となる教育) の半ば手作りの特徴は、これらの問題に明らかに抗している。ここで重要なことは、マルティニック人が、与えられた (社会的、文化的、精神的) 状況を考慮した方法とプログラムを適用しながら、自らの手でマルティニック人に見合う教育をおこなえるということ、これを示す意志のうちにある。(A, p.140 下線強調引用者)

ここで「教育上の憂慮すべき諸問題」と述べられているのは、一言でいえば、植民地教育である。フランス語の「正しい使用」はもちろんのこと、共和主義の名のもとに、地域の偏差を認めずに等しく「フランス人」として教育する方法である。IME 設立の目的は、この内面からの同化に抗い、下線にあるとおり、大学への橋渡しになるような、独自の教育をおこなうことである⁴⁾。

IME のいわば設立趣意書はこう続く。

教育は決して金で買われてはならないはずとはいえ、マルティニック学院は目下の状況では公的施設としてあり得ることはできない。政教分離の戦い (combat laïque) は前世紀末のマルティニック社会では最先端の役割を担ったが、おそらく今日ではその存在意義を失ったのである。同化支持ならびに「ベケ」追放の戦いをおこなう島の中産階級の武器とは、頼みの綱として本土に訴えることである。この戦いが完了すると、公立学校は同化の制度のように、場合によっては現在の政治権力の手先のように見なされる。公立学校 (école laïque) と私立学校 (école privée) の伝統的対立はここではマルティニックの学校 = 疎外された学校という現実を覆う役割しか果たさないだろう。(A, p.140 下線強調引用者)

この箇所は、IME が私立学校であるがゆえ、財政面の援助が必要だという論理を導くために書かれている。フランスの公教育は、政教分離 (laïcité) の原則に基づいているため、フランスの私立学校は基本的にカトリックをはじめとする宗教教育と結びついている。もちろん、IME は



図1 「マルティニク学院」校舎 (出典 www.edouardglissant.fr)

宗教教育のためでなく、「同化の制度」である公立学校に対抗するために設立される。ここで興味深いのは、下線部にあるように、公立学校の整備は「島の中産階級」が進めているという認識である。この場合、「島の中産階級」とは、フランス公教育の優等生として、安定的な所得を得ることに成功した黒人ならびに混血階層（エリート層）であり、具体的には、教師をふくめ公職に就いている者たちの家庭である。したがってIMEの戦いは、中産階級ではない、いわゆる無産の階級に、同化主義的ではない教育の機会を提供することにある。しかし、ここには次に指摘される問題が当然ながら出てくる。

以上のことから著しく限定的な特徴が帰結される。すなわち、IMEは、存続のために、生徒の親が支払う学費によって賄われるほかはないということである。しかし、マルティニク人民全体のうち、大半は子供に学費を支払うことはできない。この状況に対する唯一可能な試みは次の対処療法的な対策を講じることである。IMEの生徒の5分の1が本校の提供する奨学金を受けるというものである。[……] IMEの使命はマルティニク共同体が教育を引き受けるための準備をおこなうことである。この展望は、われわれの努力を方向づけると共に、状況の要請とわれわれを勇気づける諸理念とのあいだの現在の矛盾を把握することを可能にしてくれる。(A, p.140)

この記述からは、IMEの学費がいくらであったのか、奨学金をどのように捻出していたのか、教師陣への報酬はどうしたのか、といった経営上の問いが当然ながら出てくるものの、残念ながら現状においてはこの方面での調査研究がなされていないために不明である。いずれにしても、このように当初から予想されていた困難な課題に対して、最初から諦めるのではなく、理念のためにリスクを背負って行動するというグリッサンの人物像がこの点からうかがえる⁵⁾。

教育を、マルティニク共同体が発展させる、物まね的でない文化に結びつけること。マルティニクで入手できる情報の見取図は定期的に欠いているとはいえ、現代世界の諸問題へと心を開くこと。あらゆる水準に対して、人びとを決定的に満足させてしまうようなあらゆる方針の宣言から遠く離れて、創造への大胆さをかき立てること。カリブ海の環境

への意識を拡張すること。——以上により IME が教育施設であるだけでなく、文化的複合体のようなものであることが説明される。
(A, p.141 下線強調引用者)

下線を引いた「創造への大胆さ」とは、グリッサン自身が実践するものであると共に、『カリブ海序説 (Le discours antillais)』(1981 年)において、マルティニック文化創造に必要なこととして、たびたび言及されることである。「カリブ海的環境への意識」の拡張もまた、この時期の「カリブ海性 (Antillanité)」というヴィジョンと共鳴する。フォンクアによれば、IME は「知的省察の唯一の場として、カリブ海の知を普及する場として、カリブ海地域の言説の自律的かつ真正な創造を経験する場として捉えられて」おり、そのことから、カリブ海やアメリカ合衆国から教師やさまざまな分野の研究者が IME に訪れた⁶⁾。すなわち、IME は、教育施設であるだけでなく、カリブ海の創造的な知を発信する多様な場であり、その媒体として登場したのが『アコマ』だということになる。

実際、IME 設立趣意書には『アコマ』刊行までの歩みが時系列的に次のようにまとめられている。

- 1967年 11月 IME 開校。
- 1968年 4月 マルティニックにおける芸術と文化の関係についての討論会（現実の文化、物まね文化）／アフリカ芸術の展覧会。
- 1969年 2月 闘争中のアメリカ合衆国黒人へのオマージュとしてカリブ海のミュージシャンによるジャズ・コンサート／2種類のレコードを出版。
- 1969年 4月 ジャズと詩。([ポール] ニジュール——[ジェームズ] フォアマン——[ジャック] ルーマンとアンティーユの若手詩人)。
レコード1作。イニモドの展覧会。
- 1969年 6月 IME の最初の映画製作。英語教育についての短篇（20分）、アンティーユ人スタッフによってロンドンで撮影。
- 1969年 11月 IME 文化センター発足。UNESCO の巡回展を展示。3000人の生徒および若者のための展示ガイド。
- 1970年 1月 68年4月の討論会の作業に着想を得た[ヴィクトル]アニセの展覧会。マルティニックの歴史をおおいに「投影した」白黒の絵画。
- 1970年 1月 人文学研究グループ創立。IME 映画クラブ発足。写真・映画ラボを所有することにより、マルティニックの若者による映画班の準備が可能となる。
- 1970年 4月 イースター祭。画家と彫刻家のアトリエ。そこから生まれた展覧会。「アメリカス美術館」の最初の要素。
- 1970年 6月 『アコマ』誌刊行プロジェクト。

(A, pp.141-142 下線強調引用者)

見られるように、IME 開校からわずか数年のあいだに教育以外の文化活動が多様な形で展開されている。とくに絵画・彫刻の展覧会の場が目立つ。これには芸術を通じた教育という側面だ

けでなく、マルティニックの芸術家に発表の場をつくるためでもあったはずである。グリッサンはフランス留学時代からドラゴン画廊でおこなわれたアメリカス（カリブ海をふくめた両アメリカ大陸）の芸術家の個展の美術評を書いてきた。その後もグリッサンの著作で触れられる「アメリカス美術館（Musée d'Art Amériques）」の構想も、このような彼の長年の取組みのうちに位置づけられる。また、グリッサン自身には映画評として知られる文章はないが、IMEの文化活動として、映画に対する強い関心を示していたことも分かる（音楽については、ベレの太鼓奏者ティ・エミール、ビギン・ジャズのマリオ・カノンジュなどの「ライナーノーツ」を書いている）。

このなかで『アコマ』刊行に関わる重要な記述だと思われるのは、下線を引いた「人文学研究グループ」の創立である。のちに見るように、『アコマ』に収録されている主要な論者は、この研究グループでの発表と共同討議に基づいている。このグループ設立がその半年後に始まる『アコマ』刊行への直接的な契機となったと考えるのが妥当である。

2 『アコマ』誌について

最初に述べたとおり、この雑誌は1971年から1973年まで計5号続いた。本節では、各号の内容を検討するよりも先に、雑誌をめぐる基本的情報を確認する。

雑誌は、同じ判型（縦21.5cm×横13.5cm）と同じ表紙で刊行された。表紙には、赤い文字の「acoma」という題字の下に同じく赤い囲みのなかに引用文が入っている（図を参照）。デザインの一部をなすその引用文には次のようにある。「アコマ・フラン〔樹木名〕はこの地方のもっとも太く、もっとも背の高い木の1つである……。その樹心は、伐採したあとも長いあいだ力を保ち、地面に切り落としたばかりと同じほど、頑丈であり、湿っており、樹液に満ちているのが観察される。J.B. デュ・テルトル『カリブ海自然史』」。この樹木の名前を冠する雑誌は、カリブ海に特有にして、伐採されても強固な樹心を保ち続けるというこの引用の記述にそのスタンスを読みとることができるだろう。また、ここでは引かれていないが、マルティニックに伝わる次のクレオール語のことわざがある。「アコマが倒れると、みんなは『それは腐った木だ』と言う（Acoma tombé tout mounn di : c'est bois pourri）」。これはラフカディオ・ハーンによるクレオール語ことわざ小辞典『ゴンボ・ゼーブ』（1885年）の最初のことわざとして収録されており、その解説によれば、有力者や金持ちが不幸にあって転落すると、それまで取り巻いていた者たちが一転して軽蔑しはじめるということのようである⁷⁾。このことわざは『カリブ海序説』の冒頭に銘句の1つに引かれていることから⁸⁾、グリッサンがこの言い回しを知っていたのははっきりしている。周囲からの嘲笑を買



図2 『アコマ』創刊号表紙

うことを辞さないアイロニーの意味合いもこの雑誌名には込められているのかもしれない。

第1号の目次を開いてみると、そこには「文学、人文学、政治の雑誌」、そして「季刊」とある。1971年1-3月号（冬号）と記載されている。このことからすでに3年間のうちに、5号4冊しか出せなかったことの意味は明らかだ。順当に行けば12冊のはずだが、実際の冊数はその3分の1にとどまったわけである。第1号刊行後、順調に出版できたのは1971年4-7月号（春号）として出版できた第2号だけに過ぎない。第3号は1972年2月号という号数になり、最終号となった第4・5合併号は1973年4月号として刊行された。

この季刊化の困難は財政的問題が最大の理由であるのは間違いない。『アコマ』は1号7フランの価格がついており、年間の定期購読料は25フランだった。これは同時期に刊行されていた他誌と比べて高いわけではない⁹⁾。IMEの財政難を考えると、この雑誌が基本的にはパリとマルティニクでの定期購読者を主要な財源をしていたことは間違いない。フォンクアの指摘のとおり、この経済的困難は第4・5合併号で次のように予告されていた¹⁰⁾。

アコマは1年の沈黙の後に再刊になった。われわれは、一貫した作業を妨げるこの中断を悔やんでいる。しかしこの号を遅らせたのはただ技術的ならびに財政的な困難のみである。雑誌を配給し、**定期購読を**することで助けていただきたい（A, p.444 ゴシックによる強調は原文）

このように定期購読者数・売り上げの不足により刊行資金を得ることができなかったことが『アコマ』の物理的な限界を画した主要な理由である。

しかし、以上の確認はあくまで本論の補足的情報にすぎない。重要なのは誌面の構成である。この雑誌にはいったいどのような書き手が関わったのか。どのような種類の原稿が掲載されているのか。幸いコーパスとしては限定的であるため、1号ずつその内容を紹介しつつ確認することができる。本論ではまず創刊号を取りあげる。

3 第1号の目次と構成

- ①「無題」（pp.3-5）
- ②ジェームズ・フォアマン「**10年計画**（フォール＝ド＝フランスからの手紙）」（pp.6-32）
エドゥアール・グリッサン、ミシェル・ジロー、ジョルジュ・ゴディ、研究グループメンバー
- ③「アンティーユのいくつかの問題への導入」（pp.29-30）
- ④「マルティニクにおける集団の構造と緊張」（pp.31-43）
- ⑤「アンティーユにおける階級闘争に相当すると見なされる人種抗争」（pp.44-57）
- ⑥「**17世紀から20世紀に至るマルティニクの砂糖経済の変遷**」（pp.58-81）
- ⑦「心的不均衡の社会的＝歴史的諸基盤研究への導入」（pp.78-93）
- ⑧アンリ・コルバン「断崖の影（オラトリオ）」（pp.94-110）
- ⑨マルレーヌ・オスピス「**U.S.A.におけるニグロ文学**」（pp.111-128）
- ⑩「ノート、デッサン」（pp.129-138）

便宜的にふった番号にあるように、創刊号は10のパートからなっている。創刊号の原稿は、「文学、人文学、政治の雑誌」と銘打っているように、ほぼこの3つの領域にわたっている。ただし、「文学」を広く創作と解する必要がある。すなわち、文字表現に限らず、デッサンなどをふくめて、「文学」に当たるのは⑧と⑩である。「人文学」、すなわち人文系の研究論考にあたるのは共著の③、④、⑤、⑥、⑦および単著の⑨である。「政治」は創刊号の最初の論考に位置づけられた②であり、英語とフランス語双方が掲載されている。

ところで⑩は、「執筆者紹介」と、すでに見たIMEの趣意説明書と沿革部分をふくんでいる(「ノート」の部分)。そこで⑩から寄稿者の経歴を確認しておくと、ジェームズ・フォアマン(James Forman, 1928-2005)は「ブラック・パワーの元外務大臣」と紹介されている。フランス語で書いた著作(『解放』は黒いモノから生じるだろう)をマスベロ出版から刊行し、マルティニック滞在中にフランツ・ファノン(Frantz Fanon, 1925-61)について研究をおこなったとある。この記述から②がマルティニック滞在時に書かれたものであることが分かる。

③から⑦までの共同執筆に名を連ねるミシェル・ジロー(Michel Giraud, 1946-)については、マルティニックの学校を調査対象に「異人種間の関係についての研究論文」を執筆中とある。この主題から彼が主に⑤に関わっていることが推測される(後述のとおり実際そうである)。フランスの論文検索システム「SUDOC」によれば、ジローは、1976年にパリ第5大学に「マルティニックにおける人種と階級——学校において肌の色が異なる子供の間の社会的関係」という(おそらく博士)論文を提出している。同論文は1979年にアントロポス出版から刊行されている。これに対して、ジョルジュ・ゴディ(Georges Gaudi)についての紹介はない(これも後述のように彼は⑥に主に関わっている)。⑨のマルレーヌ・オスピス(Marlene Hospice, 1946-)は映画についての論文および、カリブ海の生活の多様な側面について共作の短編映画を制作している、とある。この時期は映画に関心があったようだが、その後の彼女の活動をたどると、小説、ルポルタージュなどを何冊も出版しており、むしろ書き手として活躍した。同じく「SUDOC」の情報では、2007年にマルティニックを調査対象とする人類学者フランシス・アフェルガン(Francis Affergan)の指導のもとに「混血児(métis)」という用語をめぐる博士論文を提出している。

⑧のアンリ・コルバン(Henri Corbin, 1934-)はグアドループ出身の詩人である。「執筆者紹介」欄にはこれまでほかの雑誌に発表した詩作品が記されている。コルバンは、一般には知られていないが、グリッサンが高く評価する詩人の1人であり、詩集の序文も1度ならず寄せている。

⑩には、1970年4月のフォール＝ド＝フランスでおこなわれたフェスティヴァルに参加した芸術家のデッサンが数枚掲載されている。⑩の情報によれば、キューバの彫刻

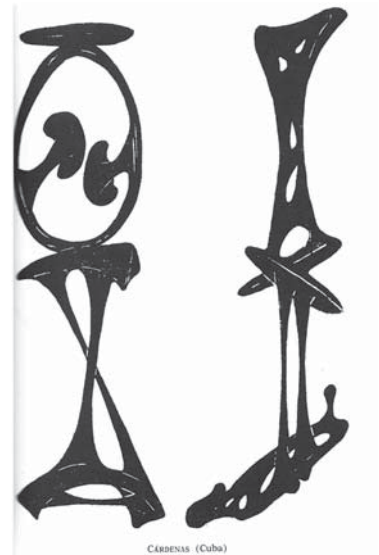


図3 カルデナスのデッサン(『アコマ』第1号所収)

家アグスティン・カルデナス (Agustín Cárdenas, 1927-2001), アメリカ合衆国の画家アーヴィング・ペトリン (Irving Petlin, 1933-), アルゼンチンの画家アントニオ・セギ (Antonio Seguí, 1934-) がこのフェスティヴァルにそれぞれ招待されており, そのデッサンが雑誌にも1点ずつ掲載されている。

以上から読みとれるのは, まず創刊号の中心をなしているのは, 雑誌全体のおよそ5分の3の分量を占める, 「人文学」のパート (③, ④, ⑤, ⑥, ⑦, ⑨) だということである。とくにグリッサンを筆頭とする共同名義のパートは, IMEの「人文学研究グループ」の成果だと考えるのが妥当だろう (この点は内容面からものちほど確認する)。また, 執筆者に大学で訓練を受ける若手研究者がふくまれていることも注目に値する。

もう1つの特徴は, 雑誌がアメリカ合衆国の黒人解放運動への関心を示していることである。それは⑧の主題と, 何よりもジェームズ・フォアマンの手紙から『アコマ』誌の巻頭を飾っていることから察せられる。

次節以降では, この2つの特徴に注目して主要な論考の内容を検討することにする。

4 巻頭言とフォアマンの文章の紹介と分析

フォアマンの「手紙」の前には無題の文章①が附されている。この文章には, 記名がない。しかし, この雑誌の「編集長 (le directeur de la publication)」にグリッサンの名がクレジットされていることから, さらにその文体と内容からも, グリッサンの手によるものと見てほぼ間違いない。

4-1 巻頭言

①は, フォアマンの「手紙」への導入文と実質的な創刊の辞の2つの役割を果たしている。より正確には, ファノンについて語るフォアマンの手紙から『アコマ』を始めることの意義が語られている。①によれば, フォアマンは「何よりも脱植民地化の理論家 [ファノン] の思い出のうちに自らの真実を探しており」, 「手紙」を通じて示されるのは「ニューヨークの一知識人の関心事, 不安, 意志」である (A, p.7)。たとえアメリカ黒人の置かれている状況がマルティニック人のそれと隔たり, ファノンの思想と行動が今日のマルティニック知識人の関心事と隔たっていようと, 「われわれはこの二重の記号のもとに『アコマ』を位置づけるのを選んだ」という (Ibid.)。

『アコマ』が, アメリカの黒人解放運動にも, このアメリカ黒人活動家にも強い関心を抱いていることは明らかである。しかし, 前述の陰影をふくんだ言い方に表れているように, この創刊の辞は, フォアマンや彼の信奉するファノンの発言を雑誌の指針とするものではない。そうではなく, 彼の手紙がアメリカの黒人運動とマルティニックにおける批判的知識人を中継するものであるとともに, マルティニックの現状の課題を考察するさいの参照点であるということだ。

この無題の文①では, 雑誌の中核にあたるのが「人文学」であることがこのような形で示される。

われわれの手による学 (science de nous-mêmes), 知識人集団によって決められるのではなく、われわれの民によってのみにしか完遂されることのできないものの予知 (préscience)。これが『アコマ』の野心にして現時点での限界を表している。この雑誌はガイドや行動手段ではなく、よりよく改善されてゆく、作業道具であると自認している。(A, p.8)

それと共に、この雑誌には、執筆者（少なくともグリッサン）の知識人という自己規定とその限界が示されている。すなわち、人民をより良く指導してゆくための教条的なテキストとして読まれることへの拒否が表明されている。ここでは知識は、学歴エリートの特権的な専有物ではなく、普通の人びとがアクセスできる「作業道具」である。そして、この「作業道具」を用いることによってやがて「学」を完成させるのは「われわれの民」だと言われる。それゆえ、『アコマ』はいかなるイデオロギーを宣言するものではないとも、別の箇所では述べられる（ファノンの代名詞のように用いられた「預言主義」や、シュルレアリスム的な「前衛」といったものは「幻想」と形容される）。

以上から明らかだと思えるのは、この雑誌が、長期的にはIMEの教育活動と結びついているということである。高等教育への導入教育までを学んだ最終学年は、『アコマ』の潜在的な読者であるだろう（たとえばグリッサンは、エメ・セゼールが1940年代に刊行した『トロピック (Tropiques)』誌をシェルシェール高等中学校時代に読んでいた)。さらにはIMEの生徒から読者のみならず書き手も現れることも展望できただろう。『アコマ』は少なくともその出発点においてはこうした展望のもとに構想されていたと考えられる。

4-2 フォアマン「10年計画 (フォール＝ド＝フランスからの手紙)」

フォアマンの文章は英語で書かれており、そのフランス語訳が見開きで掲載されている。原題は「10年計画 (フォール＝ド＝フランスからの手紙)」, フランス語訳の題名は「フォール＝ド＝フランスからの手紙」である。手紙は「ドナルドとフローラ」という友人に宛てられており、冒頭に「フォアマンの日記, 1969年12月21日午後14:30」という特定の日付が入っている。

この文章は、文中の記述によると、ニューヨークで宛先の人物ドナルドから彼の準備中の雑誌への寄稿を求められたことから発表された、「すべての友人」に宛てられた手紙だとされる (A, p.21)。『ジェームズ・フォアマンの政治思想』(1970年)という論集に収められていることから¹¹⁾, 『アコマ』にはその後に転載された。文中には、グリッサンとIMEへの言及は見られないが、すでに見たIMEの沿革の1969年4月にフォアマンの名があることから察するに、マルティニック滞在中に彼はグリッサンたちの活動に関わっていたと思われる。

「手紙」は、ファノンの伝記執筆に取り組んでいる著者がフォール＝ド＝フランス市滞在中におこなったファノンの母へのインタビューの話を軸に展開される。ファノンの母のインタビューから著者はその前におこなったサミー・ヤング (Sammy Younge, 1944-1966) の母との対話を想起する。サミー・ヤングはアラバマ州タスキーギ大学の、暗殺された黒人学生活動家である (フォアマンは1968年に彼についての伝記を出版した)。フォアマンは、この早世した二人の「英雄」の母たちの、またファノンとヤングの、その違いを意識しながらも、両者を結びつける共通項

を語ろうとする。

このモーメントはただ、2人の母の人生とその息子たちの人生の、時間、場所、状況に関するもので違っただけだった。しかし2人の息子サミー・ヤングとフランツ・ファノンの経験は、その本質においては同じだった。なぜなら彼らは、アフリカ人の、誇り高い黒人の子孫であり、彼らの声はレイシズムと搾取に抗してきたのであり、彼らの人生は、人間の解放を実現する最後の寄与となりえたことを世界に知らしめる前に、中断してしまったのだから。(A, p.18)

見られるように、フォアマンの文章は、この時期の解放闘争の男性活動家におそらく共有されていただろう言葉遣いによって武装されている。「レイシズム、植民地主義、資本主義と帝国主義に対抗する、社会主義世界のための戦いという、正しいイデオロギーで武装した[……]」(A, p.30)というような言葉遣いを支えるのは、「世界社会主義(world socialism)」に向けたフォアマンの揺るぎない信念であり、ファノンの仕事をベースに武装闘争の理論を考察するという、活動家としての使命である。「イデオロギー闘争」を最優先課題に掲げるフォアマンのこのような立場に、グリッサンは思考の制限を感じていたに違いない。しかし、その立場の違いを超えて、グリッサンは、フォアマンの闘争に遠くから連帯すると共に、何よりも、サミー・ヤングとフランツ・ファノンという、異なる場所で命を投じた2人の闘士を結びつける彼の想像力のうちに、「カリブ海性(l'Antillanité)」に連なる、重要な可能性を読みとったはずである。

5 共同研究の紹介と分析

フォアマンの「手紙」に続くのが、創刊号の実質的な中心である③、④、⑤、⑥、⑦のIME研究グループによる共同研究である。

③の「アンティーユのいくつかの問題への導入」は続く4つの論考への序論であり、共同名義になっている。この文章は、人文学系のフランス語圏アンティル諸島(アンティーユ)の先行研究の確認から始まる(これは、共同研究が自然科学を対象にしないことを含意する)。先行研究が少ないという指摘ののちに、ミシェル・レリスの『マルティニクおよびグアドループにおける文明の接触』(1955年)を筆頭に、人文地理学の分野でのユジェーン・ルヴェール(Eugène Revert)のマルティニク研究、グアドループに関するギイ・ラセール(Guy Lasserre)の仕事が挙げられる。さらにはこうした研究が現地の人間によってなされていない点も確認され、そうした理由から「マルティニク学院を中心に研究グループを組織するという試みは、フランス語表現アンティル諸島における人文学研究の中心そのものに根づくように思われる」と述べられる(A, p.33)。そして、「長い植民地の歴史の遺産としての、アンティーユ社会の構造ならびにアンティーユ人の一般精神に固有のさまざまな障害の性質」(A, p.34)がこの研究が解明しなければならない主要問題の1つとされる。

以上の見取図から導かれるのが後続の論考となる。それらの共同の論考は、すぐに見るように、口頭発表とそれをめぐる共同討議という形をとっている。つまり、本格的な研究への端緒とし

てそれぞれの論考は位置づけられている。また、共同討議部分は一部が要約的に再現されている(誌面上の制限よりも再現に関する技術的な問題だと考えられる)。

5-1 グリッサン「マルティニックにおける集団の構造と緊張」

4つの論考のうち、最初の④「マルティニックにおける集団の構造と緊張」は、グリッサンが基調報告をおこなっており、のちに『カリブ海序説』に、修正の上、再録されている。

ところで、口頭発表原稿の性質とはおよそ無縁に、グリッサンのここでの記述は、その問題設定、独特の術語、議論の圧縮と抽象性からして、難解だと言える。そのような一筋縄ではない報告をやや強引に要約すると次のようになる(A, pp.33-47)。

マルティニックの共同体は、世界各地の他の共同体とは異なり、その生きるべき「時空間(espace-temps)」にうまく適応することができない。空間は、奴隷貿易によって父祖の土地を追われ、奴隷制によって所有を禁じられてきた。時間もまた、共同体によって内面化されない。このため、マルティニックの共同体は集合的記憶を欠き、歴史意識の不在によって未来への信頼も築けない。このような「時空間」の非適応ゆえ、マルティニック共同体は特殊な不均衡を被りながら、不安定に生きている。さて、このような共同体を構成しているさまざまな「集団(groupe)」にはどのような特徴が見られるか。一般に「集団」は歴史的に「構造化(structuration)」されることで、初めて「集団」としての「構造(structure)」を有する。ところが、マルティニックではこの「構造」は植民地化の歴史によってフランスにより押し付けられたものである。具体例をあげれば、家族である。集団としての家族は、一般階層では、書類提出を通じて公的に認知される家族という「構造」を拒否する傾向にある。これはおそらく1848年の奴隷制廃止によって無理やり与えられた戸籍書類に対する無意識の拒否であると考えられる(その一方で、マルティニックの中間層は、押し付けられた「構造」をやすやすと「受け入れる」)。集団におけるこの「構造」の拒否は、しかしながら、「無=責任 non-responsabilité」という否定的な帰結をももたらす、両義的なものである(この点は、複数の女性に対する男性の「種付け」行為に関するロラン・シュヴェローの発言が補強している)。また、この「構造」の拒否において見られるのは、「緊張(tension)」(心的ストレス)であり、それがたとえば、その解消ないし発散として、カーニヴァルのような「ばか騒ぎ」になったり、より否定的な仕方では、「理由なき暴力」、「抑鬱状態」、「言語的錯乱」という病理的な問題を引き起こす。重要であるのは、このような集団の「構造」の拒否やそれに伴う「緊張」の発露が、「共同体の時空間を手なずけたいという欲求を絶望的に示している」(A, p.37)ということである。

以上がグリッサンの報告のおおよその内容である。この報告でも述べているとおり、グリッサンの作業の目的は「問題の歴史化(historicisation du problème)」にある(A, p.42)。共同体の病理を診断し、その病理の原因を歴史的に探る作業だとでも言えるかもしれない。その後の討議は論点が多岐にわたるので割愛し、研究グループのメンバーとおぼしき発言者の名前のみ発言順に列挙する。マレーヌ・オスピス、ロラン・シュヴェロー(Roland Suvélor, 1922-2011)、クリスチャン・ルイ＝ジョゼフ(Christian Louis-Joseph)、ミシェル・ジロー、ジョルジュ・ゴディ。ルイ＝ジョゼフについては情報が乏しいが、シュヴェローはマルティニックの著名な知識人で、当時の現地の歴史家たちが総力をあげて取り組んだ、マルティニックおよびグアドループの記

念碑的な歴史事典『アンティエユの記録 (Historial antillais)』(全6巻, 1981年)の総監修の仕事で知られる(『アコマ』第2号の「執筆者紹介」では当時「マルティニク統一社会党」書記長とある)。討議での発言内容からもシュヴェロールがグリッサンに次ぐ重要な研究メンバーだと考えられる。

5-2 ジロー「アンティエユにおける階級闘争に見なされる人種抗争」

グリッサンの発表に続くのが、⑤のミシェル・ジローの報告「アンティエユにおける階級闘争に見なされる人種抗争」である(A, pp.48-61)。文章は、難解きわまりないグリッサンと比して、明晰にして明快な、いわゆる学術的な報告原稿であり、アルチュセル、バランディエといった同時代のフランスの学者への言及をちりばめた、いかにも若手研究者らしい筆致である。

ジローの報告は5節構成である。第1節は仮説の提示である。それは元植民地だったアンティエユ社会における社会的・経済的階級は、人種集団と重なり合うというものである。第2節ではその仮説検証のためにフランス領アンティル諸島の植民地化の歴史が振り返られる。すなわち、初めにこれらの島がフランスから来た冒険家によって占有されると共に、先住民が殲滅され、プランテーションの労働力にアフリカから多くの人びとが連れてこられた結果、経済的支配層である白人と、労働力(奴隷)である黒人という2つの階層が作られる。さらに白人農園主と奴隷の黒人女性とのあいだに混血^{ミューラートル}も生まれる。奴隷制下におけるミューラートルは、解放民になった場合も、多くは経済的・政治的な力をもてないよう仕向けられる。その後、1794年のヴィクトル・ユグによる白人支配層の処刑によってグアドループでは最初の変化があった。その後、両島に共通する大きな変化は1848年の奴隷制廃止である。これにより、元奴隷の多くは小農民となった。ミューラートルは商活動を通じて財を蓄積し、政治にも参入することで「ミューラートル階級」を形成した。この階級が1946年の海外県化を推し進める主体となる。以上の人種と階級の重なり合いが示されたのち、第3節では、レイシズムが経済的搾取の要素になっていることが検討される。すなわち、「レイシズムとは植民地化によって生まれた近代のイデオロギーである」(A, 53)ことがいくつかの引用を通じて確認される。第4節は、レイシズムの社会的機能が、まず黒人・白人間の性関係を事例に示される。それによれば、とくに公的な結婚が階層の上昇を可能にする「社会移動 (mobilité sociale)」の要因のように見なされるために妨げられてきた。次いで、教育を事例にとり、教育を通じた黒人の社会移動の阻害や、黒人を下位の社会階層に位置づけるイデオロギーなどが紹介される。第5節は、結びとして、海外県化後の人種間の抗争について、それが階級闘争の局面に向かうことの困難を現状への考察から報告者は示している。

以上のジローの報告に対して、グリッサンは手厳しい意見を呈する。すなわち、この報告が白人支配者の視点にほとんど限定して人種関係を考察していること、レイシズムを被る人びとがこれをどのように生きているのかの分析が重要であること、そして〈他者〉に拒否された尊厳を回復する必然的な要求(ネグリチュードをおそらく念頭に置いている)の強調が必要であること、そうした点の不足を挙げたのち、より決定的な批判をおこなう。

範疇転換 (hypostase) が**問題の根底**を捉え損ねることしかできない場合、アンティル諸島における人種闘争を社会闘争の単純な代理物のように、したがって、多かれ少なかれ一部を思考停止にさせる代理物のように見なすことができるのか。(A, p.59 ゴシックによる強調は原文)

グリッサンの考えでは、人種闘争と階級闘争 (社会闘争) は代替可能ではなく、カリブ海では2つの闘争は相互に結びつきながらも、完全に重なり合うことのない異なる戦いの局面を有している。階級闘争が階級の消滅ならびにプロレタリア独裁に至るならば、人種闘争は人種間の差別廃止を導く。2つの闘争の形態には「〈時間〉のずれ」があるとグリッサンは考える。このように、討議の抜粋は、研究メンバーの考え方の違いをスリリングに記録している。

5-3 ゴディ「17世紀から20世紀に至るマルティニックの砂糖経済の変遷」

3本目の⑥の報告「17世紀から20世紀に至るマルティニックの砂糖経済の変遷」を担当するのはジョルジュ・ゴディである。この報告はその題名にあるようにマルティニックの砂糖生産をめぐる経済史であり、奴隷制時代から20世紀までの砂糖経済の変遷を概観したもので、とくに奴隷制時代についてはラバ神父の『仏領アンティル諸島滞在記 (Nouveau Voyage aux isles françoises de l'Amérique)』(初版1772年)の記述を参照している。

報告者による結論部の経済変遷の図式化によれば、マルティニックの砂糖経済の変遷は7つの時期に分けられる。第1期 (1650-1664年)。サトウキビ栽培が始まった時期。この時期はオランダ商船が中心、本格的な奴隷貿易の開始。第2期 (1664-1670年)。コルベールによる西インド会社の創設。フランス商船による独占貿易。第3期 (1674-1784年)。植民地協定下における宗主国の独占体制。すなわち、諸外国の砂糖への関税、マルティニックでの製糖所建設の禁止 (原料輸出地としての植民地) の政策がとられる。1784年に排他独占貿易の緩和 (サン＝ピエールに諸外国用の貿易港の建設)。第4期 (1784-1860年)。王政復古後に排他制に戻るが、1860年の政令でマルティニックの自由貿易化。第5期 (1860-1892年)。高価格の砂糖を諸外国に売ることができず、1892年の政令で保護貿易に戻る。この間に甜菜とのサトウキビの競合。1848年の奴隷制廃止から移民の受け入れ。金融機関の開設によりマルティニックにサトウキビ工場が建設され、生産力の増大。第6期 (1892-1947年)。保護貿易期。甜菜砂糖の優位。フランスとの政治的結びつきの強化。第7期 (1947-現在)。海外県化。サトウキビ産業の壊滅。

ゴディの報告後の討議での発言から、グリッサンがこの研究を高く評価していることが分かる。グリッサンによれば、「驚くべきは、この変遷を画する重要な日付がマルティニックの社会的・政治的歴史の重要な時期と対応していること」であり、「砂糖経済の危機はマルティニックにおける生活のリズムを刻んでいる」(A, pp.77-78)。この指摘から、経済的な面と社会・政治的な面との関係を探る仕事ができれば実り豊かなものになるだろうとグリッサンは述べている。このグリッサンの見解を踏まえれば、ゴディの発表は、政治・社会的側面でのミシェル・ジローの研究と相補的であるとも考えられるかもしれない。

5-4 グリッサン「心的不均衡の社会的 = 歴史的諸基盤の研究への導入」

最後の報告⑦は、再びグリッサンである。「心的不均衡の社会的 = 歴史的根拠の研究への導入」は、④と同様、『カリブ海序説』に、「不均衡の複数の基盤」と改題の上、再録されている。⑦は内容面では④と連動しながらも、主題へのアプローチが明確な点で、全体の見取図を④よりも得やすい。この発表でグリッサンが試みるのは、マルティニックの共同体に見られる「心的不均衡 (déséquilibre mental)」という「問題の歴史化」(A, p.42)である。

この論考は3つのパートから構成されている。まず第1節では、「心的不均衡」の原初的基盤が3点挙げられる。第1に、奴隷貿易に発するカリブ海への強制移住と根こぎである。第2に、主人の側から道具や機械が与えられることから来る、技術への無責任である（これに対し、封建制下の農奴は、労働生産物を領主に与えるために、自ら収益を増大させなければならず、必然的に技術を進歩させる）。第3は、環境と媒介関係をもつことの欠如である。奴隷は日常生活における物の使用を最低限に済ませる。たとえばヒョウタンを加工して皿やコップに使われるクーイは、日用品の機能しか持たない。ヒョウタンの使用が多様であるアフリカと比べた場合、アフリカは土地（環境）との安定的な媒介関係を築いているが、アンティーユではそうではないのである。この「心的不均衡」の状況を変えるものとして、民衆蜂起のほかに、奴隷制時代に重要な機能を担ったのが、逃亡奴隷と呪術師であるという。「唯一の民衆的英雄」(A, p.85)である逃亡奴隷は、しかし、支配者側によるイメージ操作と民衆の表象のなかで否定的なものとされる。同様に、アフリカ文化の保持を託されて治療をおこなう呪術師も、その文化的機能を奪われて、信を失い、いかさま師になりさがる。このような逃亡奴隷と呪術師の機能不全もまた共同体の「心的不均衡」を引き起こす要因とされる。

第2節では、マルティニックの歴史を捉える上で重要な2つの見解が提出される。1つは、「植民地支配者 (colonisateur) の念入りな行為によって集合的意識 (記憶) のなかから消し去られてしまった」(A, p.88) のがこの島の歴史だということである。もう1つは、その歴史が、農業労働者という大衆を「括弧に入れ」、エリートを「ショーケースに入れる」、すなわち、大衆とかい離したエリート中心のものだということである (Ibid.)。この2つの基本的見解に沿って、今度は、マルティニックの歴史が、(a) 1848年以前、(b) 1848年から1946年、(c) 1946年以降という3つの時代区分による経済システムの変化との関係において示される。グリッサンによれば、(a) は〈プランテーション〉システムの組織化とそれに伴うアフリカ奴隷の非所有、「ミューラートル階級」期である。(b) の奴隷制廃止以降は、甜菜との競争によるサトウキビ経済の衰退、エリートと呼ばれる「中産階級」ミューラートルの政治的・経済的成功の常態化が見られる1世紀であり、「プチブル」的政治代表制度が確立する。(c) は海外県化後であり、サトウキビ産業の壊滅、第1次産業から第3次産業へ経済システムの移行、「フランス化」の進行が見られる時期である。

以上の見取図のもとに、マルティニックの危機的な将来が展望される。

想定しておかねばならないが、マルティニックにおけるフランスの植民地支配は、あらゆる植民地支配の「最高段階」に、すなわち1つの共同体を完全に非人格化し、**外部の**身体のなかにこれを「吸収」するまでにまもなく至る危険性があり、この意味でマルティニッ

クの植民地支配はそうならば近代史でもごく稀な「成功した」植民地支配の1つであることが露になるかもしれない。(A, p.90 ゴシックによる強調は原文)

第3節では、このような現状に対する深刻な理解のもと、これまでの前2節で論じてきた「心的不均衡」(「不健全性 (morbidité)」とも呼ばれる)の問題と相関する、マルティニックにおける「社会階級」の「非=機能性 (non-fonctionnalité)」が検討される。これは、ある社会階級がその社会のなかで果たす機能の不全性や、標榜される機能と実際の機能とのずれを示すために編み出された術語である。この社会階級の「非=機能性」の分析は、この島でいわゆる階級闘争と呼ばれるものが起こらない要因を考察するものである。

まず白人農園主の階層、すなわち島の経済的支配者であるベケは、生産手段を手中に収めながらも、この生産を統御し流通させる本国勢力に従属している。すなわち本国勢力の経済転換に応じてベケも変化を迫られる(サトウキビ生産からサービス部門への経営転換)。したがって彼らは「民族ブルジョワジー」を構成することはできない。次にエリート層は、「その使命は「中身」を欠いた「代表」であり、生産流通におけるその役割と影響力はゼロである」(A, p.92)。このなかで、唯一、経済流通のなかで機能を果たし、民族的使命を有する農業労働者階級もまた、蜂起の鎮圧、労働の分散化などで、その使命も経済的機能も無化され、階級解体に向かっている。

このような分析を通じてグリッサンが最後に提出する「処方箋」は次のようなものである。

政治的な言い方ではこうなる。ここでは「階級闘争」は経済流通の独立の民族的問題を提起しなければならず、民族的要求は社会組織(たとえば「民族指導者」をなすというエリートの機能を欠いた使命——うぬぼれ——)を問い直し、したがって階級闘争を「開く」ことをしなければならないということだ。(A, p.94)

これに続く議論では、「剥奪」がハイチの場合のように「対決」に変容しなかったという話の流れのなかで、ミシェル・ジローが「対決」によって「不健全性」を克服したケースにブラック・パンサーを挙げると共に、マーカス・ガーヴェイに言及している点が興味深い。ここでは内容には踏み込まないが、マルレーヌ・オスピスの論考⑨にも見られるように、『アコマ』全体を通じてアメリカの黒人解放運動が、1つの進歩的な事例として(とくに若手研究者に)捉えられていることもうかがえる。

小括

以上、本論では『アコマ』第1号を中心にその構成および内容を検討してきた。本論をひとまず締めくくりにあたり、これまでの検討から明らかになったことを改めてまとめておこう。

この雑誌は、IMEの教育活動と相関する研究活動および文化活動の一環として刊行された。文化活動面では、IMEの沿革に見られた数々の芸術活動(展覧会の開催、映画製作など)の報告と記録の場をなしている。とりわけ、アメリカスという、カリブ海から見た文化的横断性をグリッサンが強く意識していることは、カルデナス(キューバ)やセギ(アルゼンチン)といっ

た芸術家を招聘し、雑誌にデッサンを掲載していることから分かる（この企図は、「アメリカス美術館」の創設として夢見られる）。

研究活動面では、IMEの研究グループを中心とする共同名義の報告にあったとおり、グリッサンによるマルティニックの分析に見合った術語の創出など、学術面で高水準かつ濃密な研究の土台を形成していた。これは、これまでのカリブ海の文芸誌のなかで見てもきわめて特異な試みであると言えよう。

また、この点で、グリッサン研究の観点からも非常に重要であるのは、共同名義のパートが、一見各報告者の関心から主題が選ばれているようで、全体的に捉えた場合、これらは緊密な連関をなしているということである。すなわちグリッサンの第1報告「マルティニックにおける集団の構造と緊張」は、問題とすべき事柄を素描的かつ包括的に示したものであり（このためにきわめて錯綜した論旨となっている）、人種問題と階級をめぐるジローの第2報告と、砂糖経済の変遷に関するゴディの第3報告の各主題は、最終的に、グリッサンの第4報告「心的不均衡の社会的＝歴史的諸基盤の研究への導入」において批判的に（言うならば弁証法的に）統合されていると考えられるのである。そのように捉えることで一連のセミナーの記録とおぼしきこれらの論考が、グリッサン、ジロー、ゴディ、研究グループメンバーという共同名義で掲載されなければならない意義が明瞭に見えてくる。この点は、グリッサンの単著『カリブ海序説』では、再録された論考の配置も異なるため、この共同研究の連関を感知するのは難しい。

別の角度から眺めれば、この共同研究は、グリッサンを筆頭とするある種の「学派」という様相も呈している。指摘したように、研究メンバーにはグリッサンと意見を異にする発言も収められているが、全体の印象は、あくまでグリッサンが研究班長という立場であり、その意味で、ジローとゴディの研究に対する発言のうちには、教育的な配慮をも読みとるべきだろう。

もう1つ指摘しておくべきは、雑誌全体として、少なくともこの創刊号では、アメリカスの時空間が非常に意識されていることである。キューバへの言及も出てくるが（⑥の議論でのオスピスの発言など）、通奏低音のように流れているのは、合衆国への黒人運動に対する強い意識である。これはフォアマンの手紙を巻頭言に置いていることが何よりも象徴的である。

本論では諸々の制約から『アコマ』第1号に焦点を絞って論じてきた。第2号から最終号までの構成と内容の検討については別稿に譲りたい。

注

- 1) エドゥアール・グリッサンについては拙論「グリッサンの〈全-世界〉」を参照のこと。第1回「開かれた船の旅」『思想』1069号（2013年5月）7-28頁；第2回「〈一〉に抗する複数の土地」『思想』1079号（2014年3月）89-111頁；第3回「歴史物語の森へ」『思想』1085号（2014年9月）64-89頁；第4回「消滅したアコマ、潜勢するリズム」『思想』1090号（2015年2月）127-149頁；第5回「カオスの海原へ」『思想』1092号（2015年4月）107-136頁。
- 2) *Acoma 1-5*, Presses universitaires de Perpignan, 2005.
- 3) グリッサン研究のなかで『アコマ』について取りあげた専門書に Romuald Fonkoua, *Essai sur une mesure du monde au XXe siècle : Édouard Glissant*, Honoré Champion, 2002 があげられる。本論でも参照する。
- 4) ここで考慮すべきは、マルティニックの教育環境である。少なくともグリッサンの世代では、中等教

育機関(中高一貫校)はフォル＝ド＝フランス市のシュルシュール高等中学校のみだった。グリッサンは同校を卒業したあと、奨学金を得てフランス本土の大学に進学した。エメ・セゼール(1913-2008)、フランツ・ファノン(1925-1961)といったマルティニックの代表的文化人も同様のコースを歩んでいる。1960年代のマルティニックでは教育の大衆化が進み始めていたのは間違いないが、現時点では筆者はリセ、コレージュの数や男女比を具体的には把握していない。今後の課題である。

5) IMEの設立者はグリッサンである。しかし、教育施設の運営は一人でできるのではなく、複数の協力者によって初めて成り立つ。この意味で、IME設立にどのような人物がかかわったのか。教育プログラムはどのようなものだったのか。こうしたことを調査研究する必要もあるだろう。

6) Fonkoua, *Essai sur une mesure du monde au XXe siècle*, op. cit., p.159.

7) Lafcadio Hearn, *Gombo Zhèbes : Little Dictionary of Creole Proverbs, selected from six creole dialects*, Facsimile Edition, Applewood Books, s.d., p. 7.「ゴンボ・ゼーブス」原一郎訳『ラフカディオ・ハーン著作集第14巻』恒文社、1983年、15頁。

8) Édouard Glissant, *Le discours antillais*, Paris: Seuil, 1981, p.7.

9) 『アコマ』は1冊およそ140頁から150頁程度であり、合併号になった最終号210頁ほどで15フランだった。たとえば手元にある1971年の『プレザンス・アフリケヌ』誌(*Réflexions sur la première décennie des indépendances en Afrique Noire*と題された号数記載のない特別号)は400頁強で15フランで販売されていた。『プレザンス・アフリケヌ』の年間購読料は22フランだった。

(10) Fonkoua, *Essai sur une mesure du monde au XXe siècle*, op. cit., p.159.

(11) 同文章を転載している以下のサイト情報を参照。

<http://www.nathanielturner.com/politicalthoughtofjamesforman.htm> (最終閲覧日 2015 年 11 月 29 日)

